

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修士論文概要書

論文題目

日本語教育における母語話者と非母語話者間の
「序列化」を見直す

—日本国内の非母語話者教師の学習経験と実践経験を手がかりに—

孫 雪嬌

2014年9月

本研究は、日本国内の非母語話者日本語教師の日本語学習経験と日本語教育実践経験を手がかりに、日本語教育における母語話者と非母語話者間(以下、それぞれ「NS」¹と「NNS」と略す)の「序列化」の問題を考察し、その見直しを目指すものである。以下、各章の概要を示す。

第1章 序章

本研究は、筆者自身の経験から生じた悩みと疑問に端を発しているものである。筆者は日本国内の大学院で日本語教育専攻の実習生として実践に参加していた際に、自分のことを否定的に捉えてしまうときが多いことに気づいた。特に周りはほとんどネイティブの日本人教師である状況の中で、ノンネイティブである自分は留学生に受け入れられないのではないかと思い、日本国内という現場で自分の立ち位置について困惑していた。その劣等感と困惑のため、消極的な姿勢で実践に臨んでいた時期もあった。もしNSがNNSより上位であるという価値観が共有されているなら、日本語教育の中でNNTは肩身が狭い思いをせざるを得ないのではないか。筆者は自身の経験から、「NS>NNS」というようなNSとNNSの間に序列が想定される問題を見直す必要性を痛感した。

言語教育の中で、「母語話者崇拜」や「母語話者教師優位意識」の存在は従来指摘されてきた。筆者はNSとNNSとの比較の中で立ち上がった力関係に問題を感じた。そのため本研究でNS・NNS間の「序列化」の問題が、「日本人」「日本人の日本語」及び「日本語母語話者教師」に、「非日本人」「非日本人の日本語」及び「日本語非母語話者教師」より価値を置くイデオロギーである、と定義している。従って、従来言われている「日本人こそ日本語の正統な話者である」、「NSの日本語＝標準、NNSの日本語＝逸脱」、「母語話者神話」、「母語話者教師優位」などの意識・言説は本研究の「序列化」に含める。

「序列化」の問題がいまだに指摘されている中、日本語の「正統な話者」ではないと思われがちなNNTは「序列化」から影響を受けているのではないか。そして「序列化」の問題はNNTの日本語学習経験と日本語教育実践経験(以下、それぞれ「学習経験」、「実践経験」と略す)を通してどのように立ち現れてくるのか。一方で、NNTとして日本国内の現場に参加できたことは、「序列化」の問題に変化が生じていることを示唆しているのではないか。従来ほとんど焦点化されていない「日本国内のNNT」という視点から、「序列化」の問題をより深く理解し、見直すために新たな示唆が得られると予想した。

本研究では以下の二つのリサーチクエスション(RQ)を設定した。

RQ① 日本国内における NNT はどのような学習経験と実践経験をしてきたのか。

RQ② 上記のような NNT の学習経験と実践経験に、日本語教育における NS・NNS 間の「序列化」の問題はどのように立ち現れているのか。

第2章 先行研究と本研究の意義

本研究を日本語教育の中で位置づけるために、「言語学・言語教育学における NS・NNS 間の権力関係」、「日本語教育における NS・NNS 間の『序列化』の問題」、「日本国内の NNT」という三つの方面から関連の先行研究を概観した。その結果、「序列化」の問題を見直すためにいまだに研究の蓄積が十分とはいえないことを指摘した。まず「序列化」の問題を考察する際に、「日本国内の NNT」という重要な視点が見落とされてきたことが挙げられる。それからこのような重要な視点である日本国内の NNT 及び彼らを取り巻く文脈への考察はほとんど俎上に載せられていないといえる。さらに、NNT の強みと役割を強調し、NNT へのエンパワーメントを図ることで NT と NNT の権力関係に異議申し立てをするというような戦略は、NT・NNT 間のさらなる対立と序列化を助長してしまうのではないかと従来の研究の方向性に疑問を感じた。

先行研究の概観を踏まえた上で、本研究は以下の三点において意義がある試みであると主張した。まず「日本国内の NNT」という新たな視点から日本語教育における「序列化」の問題を考察する。それから日本国内の NNT に焦点を当てる際に、NNT の「声」を通して彼らを取り巻く日本語教育の文脈を描いていく。さらに NT・NNT 間の「序列化」の見直しに関して、NNT をエンパワーメントする以外の道を開きたい。

第3章 研究方法と研究の手続き

本研究では日本国内の NNT の学習経験と実践経験を記述・解釈する方法として、ナラティブ・アプローチ(野口、2009)を用いた。そして NNT の語りを聞き取る際にナラティブ・インタビューを行った。データ分析の方法として、本研究は協力者の経験と取り巻く日本語教育の文脈を包括的に把握するために、語りを文単位で切片化するのではなく、一つのストーリーを構成する語りのかたまりを抽出することに重きを置く。「雪だるま式サンプリング」を用い、共通の知人の紹介で Aさんと Kさんという二人の NNT から研究の協力を得た。インタビューは Aさんに対して計二回、Kさんに対して計四回行った。

表1 研究協力者のプロフィール

仮名	性別	出身	年齢	日本語学習歴と教育歴(調査当時)の概要
Aさん	女性	韓国	30代前半	学習歴：母国での独学(5年間)、日本留学(1年間) 教育歴：教育実習(2ヶ月)、大学の別科で講師(1年間半)
Kさん	女性	中国	30代前半	学習歴：母国で第一外国語としての学習(6年間)、日本留学(1年間半) 教育歴：教師養成講座(1年間)、民間の日本語学校で講師(2年間)

第4章 Aさんの学習経験と実践経験

Aさんの日本語学習歴は高校時代の独学から始まった。大学時代の日本留学を境に、日本語能力は飛躍的に上達した。大学卒業後日本の大学院に進学し、日本語教育を専攻した。修士課程の間に参加した海外実践はAさんの人生のターニングポイントとなり、言語教育の道に進むことを決意させた。博士課程に進学した後、大学にある留学生対象の日本語教育機関である別科で日本語講師として勤めはじめ、現在に至った。

Aさんは別科という現場に参加した当初、日本国内のNNTとして学習者に受け入れてもらえるかどうかという不安を抱いていた。そして学習者や同僚教師と接している中で、日本語が母語ではないことと新人教師であることの二重のコンプレックスゆえに、同僚のNTより《自分を低く》²していたという。所属の教育機関・同僚教師・学習者・友人の〈まなざし〉が交錯している中、自分に内在する日本国内のNNTへの《偏見》に気づいた。そこから初めて《偏見》と距離を置き、反省するようになった。授業を行う中で、Aさんは自分の〈ビリーフ〉に基づき、学習者に細心な注意を払いながら、〈工夫〉を重ねてきた。その成果の一つとして、学習者から高く評価された。Aさんは学習者が満足を得たことで自分の〈ビリーフ〉を強化させるだけでなく、一人前の教師としての経験を積み、自信につなげ、さらに実践に励むようになった。このような良い循環の中で、AさんのNNTである劣等感の後景になり、「教師」の意識が形成されつつある。一方、韓国語講師と日本語講師の両方を経験している中で、NNTであるからこそ「正しく教えたい」という気持ちは常に付きまとっているという。それは授業を工夫する動機であると同時に大きなプレッシャーでもある、という複雑な心情が明らかになった。

第5章 Kさんの学習経験と実践経験

Kさんは母国で中学校から日本語を第一外国語として学びはじめた。日本留学の願望が強か

ったため、大学卒業後すぐ日本の日本語学校に入学した。その後、日本語教師養成講座に通いはじめ、本格的に日本語教師の道を目指すようになった。養成講座時代に、Kさんは日本語教師になるための理論と実践力を身につけただけでなく、自分の日本語力を客観的に見るようになった。その後養成講座に推薦され、ある民間の日本語学校で非常勤講師として勤めはじめた。NNSであるため、養成講座の時期にも非常勤講師の時期にも、実習あるいは実践の機会の面でNSより制限を受けていた。実践の中でKさんは学習者の母語ができることや文化背景を共有することを単なる教師の強みとしてエンパワーメントを図ったのではない。日本留学中の学習者の利益を第一に考えたため、逆に媒介言語の使用や学習経験の伝授で迷っていた。学習者からの感謝の言葉で教師としてのやりがいを感じた一方、「学生の質問に正しく答えなきゃ」「文法を正しく説明しなきゃ」という教師としての《重圧》を背負っていた。その後日本語学校の事務スタッフの仕事が自分により合うと思い、日本語教師の道から離れていった。

第6章 考察と結論

日本国内のNNTである/であったAさんとKさんの学習経験と実践経験の分析を通して、日本語教育におけるNS・NNS間の「序列化」の様相に関して以下の三点が明らかになった。

第一に、NS・NNS間の「序列化」の文脈は依然として一部の教師、教育機関及び学習者に共有されている現状があり、「序列化」問題の根深さが確認された。この指摘は次の三点に裏付けられている。まず、日本国内のNNTに見られた<葛藤>は「NSの日本語＝標準、NNSの日本語＝逸脱」というNNT自身に内在する「序列化」の表れである。と同時に、NNT自身に内在する「序列化」は日本語教育、ひいては言語教育において長く受け継がれてきた「序列化」の一つの縮図であるという関連性を指摘した。雇用と実践の機会の面において、NNTはNTより制限を受けている事例も見られた。さらにNNTは一方的に影響を受けるだけでなく、NNT自身もまたその「序列化」の構築に加担してしまうことが見受けられ、「序列化」問題の根深さを物語っている。

第二に、本研究を通して日本語教育における「序列化」の「揺らいでいる」側面も浮かび上がった。所属の教育機関、同僚教師、および学習者は協力者を温かく受け入れ、教師としての価値を認めていた。教育機関、同僚教師および学習者が教師を評価する際、必ずしも日本語が母語であることを第一義の基準にしていなかった態度が浮かび上がった。さらに、このような「揺らいでいる」一面は、「NNTの教師としての成長」、「学習者のビリーフ」、「NNTの雇用」をめぐって三つの「良い循環」を生み出し、「序列化」のさらなる見直しに寄与する動きが見てとれた。

第三に、日本語教師にまつわる「NT>NNT」の「序列化」は、「教師役割観」と「教師と学習

者の関係性」という二つの問題と密接に関わっていることが明らかになった。二人の協力者は「教師として間違っはいけない」「学生の質問に答えなくてはならない」という「教師の規範性」の呪縛で、自分の日本語力と教授力をアップさせようとする一方、大きなプレッシャーも感じていた。このような「教師の規範性」は「教師役割観」、及び「教師と学習者の関係性」に根ざしている構造が明らかになった。さらに「教える」内容が外国語、本研究の場合は日本語になると、「教師の規範性」は「母語話者性」（平畑、2008）と強く結びつくようになる。このような入れ子構造の中で、NTは日本語が母語であるゆえに価値が付与されている。と同時にNNTは教師としての価値が「格下げ」され、排除される恐れがある。

上記の考察を踏まえ、日本語教育におけるNS・NNS間の「序列化」の見直しに対し、本研究以下の三点を提言した。

一点目は、「序列化」を見直す第一歩は他ではなく「序列化」によって不利な立場に立たされるといわれてきたNNS自身の内省でなくてはならない。NNSが受動的に現状が変わることを待つのではなく、自ら積極的に、そして意識的に「序列化」の見直しに働きかけていくべきであろう。

二点目は、「序列化」の見直しは、ミクロレベルの変革、すなわち現場の教育機関・教師・学習者の相互作用の中で実現可能なものであるという展望が見えてきた。日本国内の現場にNNTが参入することが、NNSの教師志望者、NNT、教育機関、同僚教師、学習者を含む現場の構成員たちがNS・NNSに関する価値観をすり合わせる契機になっている。価値観のぶつかり合いとすり合わせを通してこそ、NS・NNSの関係性や言語教育の目標、教師と学習者の関係性などについて再考され、「序列化」の見直しにつながるのではないかと。

三点目は、「教師の役割」と「教師と学習者の関係性」の転換が「序列化」を見直す一つの手がかりになることが示唆されている。正しい日本語が示せるかどうか、知識をわかりやすく説明して効率よく詰め込めるかどうかという教師主導型の役割観と教師・学習者の上下関係から、教師は抜け出す必要がある。そして教師の人間性を重視する視点や教師と学習者の協働の視点に立ち、教師の資質を評価する軸を新たに設けられるのではないかと。

第7章 総括と今後の展望

本研究で得た示唆は日本語教育ひいては日本社会の文脈における意義を以下のように論じた。

まず、日本語教育におけるNS・NNS間の「序列化」に対して、本研究は日本国内のNNTという新たな視点から考察した。従ってその見直しに対しても新たな示唆が得られた。それから「NT

>NNT」の序列化に対し、NNT をエンパワーメントする以外の新たな道を模索した。さらに、本研究は従来焦点化されていない日本国内の NNT を取り上げ、彼らを取り巻く日本語教育の現状の一側面をある程度浮き彫りにした。本研究は日本国内の NNT からの発信の一つとして位置づけ、今後日本語を母語としない日本語教師志望者が日本語教育に進出するための一つの参考になることを期待されている。

NS・NNS 間の「序列化」を見直し、より開かれた日本語教育と多言語多文化共生社会の構築のために、今後次のように研究を展開させていく必要性を感じた。まず NNT のほかに、NNT を取り巻く学習者、同僚教師、教育機関、さらに政策レベルの視点から、日本国内の NNT の位置づけを複眼的に考察することが重要である。それから実際に NNT の実践現場に入り、日本国内の NNT の葛藤と成長、および「序列化」の問題に対する理解を深めたい。

最後に本研究を通して筆者自身に課している課題について述べた。日本語教師を目指している筆者はやがて実践の現場に入り、「序列化」の問題と直面する可能性があるだろう。本研究を通して得た学びと示唆を活かし、実践の中で「序列化」の問題への認識を深めながら、それを変革できる主体の一人として力を尽くしたいと思う。

参考文献

野口裕二 (2009) 「ナラティブ・アプローチの展開」野口裕二(編)(2009)『ナラティブ・アプローチ』勁草書房、pp. 1-25.

平畑奈美 (2008) 「アジアにおける母語話者日本語教師の新たな役割—母語話者性と日本人性の視点から—」『日本語教育論集 世界の日本語教育』18号、1-19.

¹本研究は表記の便宜を図るため、「母語話者」を「NS」と、「非母語話者」を「NNS」と略すことにする。従って「母語話者教師」を「NT」と、「非母語話者教師」を「NNT」と略す。

²インタビューデータを本文中にそのまま挿入する際に《》で表し、分析のキー概念を<>で示す。